

県立図書館通信



2012年
2月号

東日本大震災から
まもなく1年。

『東日本大震災 全記録

—被災地からの報告一—

河北新報社/発行 2011年8月/刊

「再生へ 心ひとつに」。

東日本大震災から4ヶ月の間、記者たちは被災地の厳しい現実を、日々、捉え続けてきました。彼らが取材してきたのは、人々の生々しい苦しみと、復興へむけた再生の力です。揺れる地震の恐怖、津波が押し流し、呑み込んだもの、後に残った瓦礫だらけの風景、原発事故や風評被害など。復興に向けて立ち上がる人々の力強い姿に、改めて圧倒されます。地元の新聞社ならではの被災地を思う心によって、後世に遺すべき貴重な記録となっています。

『北海道から沖縄まで
福を招くお守り菓子』
溝口政子+中山圭子/著
講談社/発行 2011年11月/刊

願いや祈りを、かたちに込めて。
日本にもフォーチュン・クッキーのような占い菓子や特別な思いを託した祝い菓子が多くあることに驚きます。目にも鮮やかな色彩の伝統菓子は見るだけでも楽しいですが、日本人の信仰や伝統文化などと結びついていることは、とてもユニークです。日本津々浦々のご当地で有名な菓子や、地域で密かに愛されている菓子、失われつつある菓子文化まで、その奥深い歴史とともに紹介しています。佐賀からは、婚礼用砂糖菓子「寿賀台」、唐津くんちの祝い菓子として知られる「金花糖」、武雄の「彼岸ダゴ花」などが登場します。

『草木言語花の彩時記
凛と咲く』
熊井明子/著 夏梅陸夫/写真
じゃこめいてい出版/発行 2008年3月/刊

やさしく美しく佇む、花たちの魅力。
寒さが続く日々ですが、暦のうえでは春。まもなく花のつぼみが綻び季節がやってきます。季節ごとに美しく咲く、色とりどりの花々。花が咲く季節、咲く場所、咲く様子と、愛でられ、人を癒してきたその姿を、エッセイを交え紹介しています。歌人たちの詩歌に登場する恋の花、作家や文学の主人公たちに関わりの深い花など、著者の記憶の中に残る、印象深い想い出とともに、花の魅力を語ります。花びらのやわらかさが伝わり、かぐわしい香りが届くような感じがして、心にやさしさをくれる一冊です。



383.8
Mi,93

『遠い町から来た話』
ショーン・タン/著
河出書房新社/発行
2011年10月/刊

726.6
Ta,83

非現実で、どこか懐かしい短編集。
温かみのある色使いと、繊細で柔らかく印象的なタッチで描かれたイラスト。登場する奇妙な形の生き物たちと、彼らにまつわる物語は、読者を、異国を旅するような心地へ誘います。収められた15の短編作品は、どれも独特的な個性をもち、幼い頃に抱いていた空想を呼び覚ますような、優しくファンタジックな世界を丁寧に描いています。著者は、監督作品「The Lost Thing」で、第83回アカデミー賞・短編アニメ賞を獲得しており、その作品の魅力が国際的にも注目される作家です。



470.4
Ku,33

『カフカノート』
高橋悠治/著
みすず書房/発行
2011年10月/刊

775
Ta,33

詩を旋律にのせて、カフカを辿る。
作家、フランツ・カフカが書き残した未完成の作品群を題材に、ピアニスト・作曲家である高橋悠治が、構成・作曲を手掛けた舞台「カフカノート」。スコア(楽譜)、対訳台本、制作ノートが収録されています。作品を短い文章で区切り、その文章ごとにスコアを載せたシンプルな1ページ。辿っていけば、カフカの思想と、彼を曲の思索の支えとするピアニストの想いが一体となった、新たな芸術表現の世界を楽しめます。文学であり、舞台台本であり、楽譜でもある本書から、カフカの世界を見出すことができます。

『鷹匠の技とこころ

『鷹狩文化と諏訪流放鷹術』
大塚紀子/著 白水社/発行
2011年9月/刊

787.6
O,88

人と鷹が寄り添ってきた道。

鷹やハヤブサなどの猛禽類をパートナーに狩猟を行う「鷹狩(別名、放鷹)」。その歴史は古く、一説には六千年前からあるとも言われています。人とともにありながらも、従うことを良しとせず、自らの意志をもつ鳥達。彼らの心を理解し愛し、共に狩猟を行い寄り添ってきた鷹匠と呼ばれる人々。秘術とされてきた技を含め、記録されることの少なかった知られざる鷹狩の世界を、諏訪流鷹匠であり、鷹狩文化を研究する著者が、文化継承を願って語ります。

『徒然草REMIX』

酒井順子/著 新潮社/発行
2011年11月/刊

914.45
Sa,29

現代的解釈で兼好の人柄に迫る。

『負け犬の遠吠え』で知られる著者が、隨筆『徒然草』を、現代人になじみやすい感覚で解説しています。兼好法師が好んで多用した表現や、バッサリと切り捨てる容赦のない言葉を例にあげ、「兼好は実は、こんな人だったので?」と推測する著者。軽快に語られる文章を読むうちに、兼好の生き生きとした人物像が現れ、思わず親近感が湧いてきます。難しい古典文学も、このように分かりやすい解釈であれば「なるほどね!」と納得。兼好と清少納言が解説を担うキャラクターとして登場し、漫才のように掛け合うシーンも必見です。

お問い合わせはこちらまで。
次号は3月発行です♪



■編集■ 佐賀県立図書館 企画課
図書館ネットワーク担当